

ルカによる福音書 19 : 1-10
ルカによる福音書 24 : 28-35
4月25日 2020年(日)

讃美歌 21-334 「よみがえりの日に」
讃美歌 21-563 「ここに私はいます」

「キリスト者として生きる」

本日は、多度津教会の主日礼拝の中で説教の奉仕をする機会が与えられたことに感謝します。また、このように翻訳出版記念礼拝という形で礼拝をささげることができるこの限りない恵みに、神様をはじめ、坂口牧師、皆様に感謝を申し上げます。

いつもは皆さんの側から礼拝に参加しているので、こちら側にいるのがとても新鮮です。また、多度津教会で説教をするのは初めてなので、少し緊張もしています。共に神様のみ言葉を味わっていきたいと思います。

多度津教会に通い始めたのは2017年の12月頃、クリスマス前の礼拝だったと覚えています。

私は、その年の3月に四国学院大学に赴任し、半年強が経ったころの話です。ここでの教会生活を通して、インドネシアからの技能実習生などを含む多くの方と出会うことができ、たくさんの励ましと支えを受けています。私もこの教会に貢献したいという思いも与えられ、正式な教会員になったのはその翌年の夏、2018年8月でした。

本題に入る前に、手短な自己紹介から始めさせてください。多度津教会の130周年記念誌の中で紹介した内容と少し重複するところもありますが、私はアメリカ人の父と愛媛県出身の母の間に生まれ、奈良県の生駒市というところで育ちました。小学校から規模が小さいインターナショナルスクールに通い、そこでは様々なバックグラウンドを持った人たちとアットホームな雰囲気の中で学校生活を送ることができました。高校を卒業した後、東京にあるキリスト教系の大学に入学しました。ちなみに、秋篠宮眞子様は1学年下の後輩でした。大学では、学内の寮に入っていたため、出身や生い立ちが異なる人たちとの共同生活を通して、とても貴重な体験が与えられました。多種多様な人たちに接してきたこと、出会うことができたことを今になって振り返ってみますと非常に恵まれた環境が整えられていたことに気づかされます。

大学4年生になって、就職も少し考えましたが、最終的にはアメリカの大学院に進む決心をしました。3年間、キリスト教神学を学び、ちょうど卒業したその年に、四国学院大学でキリスト教を教えるポジションの公募がありました。大学院出立ての自分が、夢にも思っていなかった仕事が決まったことについては、神様の本当に不思議な導きと恵みを感じます。今年3月より、香川での生活が5年目に突入しました。今年度からは、必須科目であるキリスト教概論を教えるかわら、宗教委員長に任命され、大学チャペルの活動と運営の方を任されました。「こんな若造に任してもいいのか」と思うことも多々あります。しかし、本当に不思議なことですが、このような重職を任されたことには、心から有難く思っております。何より、周りからの様々なサポートのおかげで、このような新しいチャレンジに挑戦できるように思います。

前置きが少し長くなりましたが、本日の聖書箇所を一緒に見ていききたいと思います。今日の2つの聖書物語から、「キリスト者として生きる」ことについて一緒に考えていきましょう。徴税人ザアカイにとっての忘れられない体験、そしてエマオという村を目指して歩いていた2人の弟子の不思議な体験は、実は深い関連性があると私は考えます。この関連する2つの物語は、「キリスト者として生きる」ことについて重要な示唆を与えています。イエス様と出会うことの意味、イエス様に従うと何が起きるのか、イエス様の弟子になっていくこと、つまり「キリスト者として生きる」こと、その様子がこの二つの物語を通して描かれているように感じます。

端的に今日のポイントをまとめますと、次のことが言えます。私たちは、イエス様に歓迎され、暖かいもてなしを受けますが、同時に私たちは歓迎する側にも立たされるのです。今回、翻訳した本の著者、英国教会の最高位聖職者を務めた元カンタベリー大主教のローワン・ウィリアムズ師が言うように「イエスはもてなしを行うだけではなく、他の人のもてなしをも引き出します。」(67頁)、ということです。この二つの物語を通して、「キリスト者として生きる」ことへの深い洞察をさらに詳しく掘り下げていききたいと思います。

それでは、はじめにイエスとザアカイが遭遇するシーンを見ていきましょう。ルカの記述によれば、ザアカイは、徴税人の頭であり、そのおかげでお金持ちであったとあります。また背

が低かったため、木に登ってイエスを見ようとしたそうです。このシーンの直前、18章の後半を読むと、イエスの前に現れたのは道端で物乞いをする盲人でした。ザアカイと盲人は社会的地位の両極に立っていましたが、2人が求めていたのは、イエスとの出会いです。この壊れた世界、傷ついた人間性、飢えと渇きのあるところにイエスはご自身から近づいていくのです（『キリスト者として生きる』15-17頁参照）。イエスはこの2つ続くシーンで同じように、2人がいるところで「立ち止まり」ます。そして、イエスはその旅の途中、道路の端で〈迷い出た〉者、〈飢え渇く〉者に、祝福の御手を差し伸べます。

19章1節にあるように一見イエスは「町を通過しておられ」るように見えますが、5節では「イエスはその場所に来ると、上を見上げた」とあります。その場所とは、ザアカイがいたイチジクの木のすぐ下です。イエスはエリコの町をただ通り過ぎようとは思っていなかったということです。ザアカイを見つけ出して、彼の名を呼ぶのです。

ザアカイの心情ははっきりわかりませんが、おそらく彼はちらっとイエスが見えたらラッキーと思っていたかもしれません。しかし、その思いとは裏腹に、イエスはザアカイに会い、親しい関係を築こうと考えていたのです。これが福音の論理です。私たちが少しでもイエスに近づきたいと思う瞬間、イエスはその何十倍、いや、何百倍、私たちの友となろうと願われ、想像を超えて私たちと出会ってくれるのです。木の上にいたとしても、どこにいても、どのような状況の中にも、イエスは私たちの名を呼びます。周りから嫌われていても、居場所がないと思っても、ダメな人間だと噂されていても、イエスは私たちの名を呼びます。

ザアカイは徴税人として、ローマ政府の腐敗した税制に加担していたのです。不正なシステムの中で利益を得ていたザアカイはもちろん嫌悪の目で見られていたわけです。でも驚くことに、周りの期待を裏切るように、イエスはザアカイに「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と呼びかけます（19:5）。イエスがザアカイと出会うことは誰も予想していなかったことです。しかし、非常にイエスらしいエピソードだと思います。私たちがほかの人から何を言われようと、イエスは私たちと共にいたいと願っておられます。私たちと一緒に時間を過ごしたい、と。思いも寄らない時に、イエスは私たちのところに来られる方なのです。

そして、イエスの一言は、ザアカイのもてなしの行為と歓迎の心を引き出すのです（67-70頁参照）。「喜んでイエスを迎えた」とあります（19:6）。このもてなしの瞬間を目撃したある人々は、「あの人〔イエス〕は罪深い男のところに行って宿をとった」とつぶやきます（19:7）。徴税人であり、お金持ちであり、背が低かった、そしてザアカイは何よりも罪深かったのです。でもこれが重要なポイントです。罪人がイエスに招かれ、受け入れられ、救いの中に包み込まれること、これがキリスト教の最大のメッセージと言っても過言ではありません。神様の一方的な愛、惜しめない恵みなのです。

ザアカイはイエスを歓迎し、彼の家に喜んでイエスを招き入れます。しかし、このエピソードの終わりには、ルカの福音書の特徴とも言える逆転が起きます。大切な客人であったはずのイエスが、最大のもてなしを行うのです。エリコで軽蔑されていた住民ザアカイが、神様の家族・民の一員として、アブラハムの子として寛大な歓迎を受け、迎え入れられるのです¹。イエスは言います。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」（19:9）。失われた者を見つけ出され、ここに示されているのは救いの物語に他ならないのです（19:10）。

ザアカイが財産の半分を貧しい人々に施し、だまし取った者には四倍を返すと約束したから、神様の家族に迎え入れられたということでは決してありません。ただただ神様の惜しめない恵みのゆえです。このポイントを忘れてはいけません。しかし、このザアカイの行動は重要でした。やはりイエスと出会う者は、造り変えられます。本来意図された人間性へと立ち返り、分かち合う生へと導かれます。「キリスト者として生きる」こと、それはイエスと出会い、造り変えられ、神と隣人との正しい交わりの中で生きることです。もちろん、私たちはその中で失敗を繰り返していきませんが、イエスが私たちを決して見捨てることはありません。

¹ John T. Carroll, *Luke*, p. 372. "Jesus directs Zacchaeus to extend hospitality to him and when he does so joyfully the honored guest becomes the one who offers hospitality: gracious welcome of a despised resident of Jericho into the community of God's people..."

それでは、このザアカイの話を踏まえて、2つ目の物語に移りましょう。このエマオまでの旅の物語にはイエスの復活が背景にあります。ザアカイの物語とは異なり、復活後の物語なのです。そして、キリスト者は復活信仰を受け継いでいます。つまり、復活を信じるキリスト者としては、すべての物語、瞬間の中に復活したイエスに出会うきっかけが与えられています。エマオに向かう2人の弟子のひとりにはクレオパという弟子ですが、それ以上の情報は記されていません。この匿名性があるから、私たち読者として、自分自身をこのエマオの物語に置き換えていくことができます。弟子の歩みと自分の歩みを重ね合わせて、この物語の意味を味わうことができます。「キリスト者として生きる」こと、それは私たちがあのエマオへの道のような出来事を常に体験することです。

このエマオの話とザアカイの話の最大の違いの1つは、イエスであることを最初はわからないという点にあります（「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」

(24:16)）。ある2人の弟子がエルサレムを離れ、エマオという村を目指して歩き始めました。彼らの尊敬する先生イエスが十字架により処刑され、絶望と混乱の中、先が見えない状況の中にいたのです。その中で、「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」と15節にあります。イエスがエリコの町を歩き、ザアカイがいる木の下に近づき、立ち止まったように、甦られたイエスは、御自身の方から2人の弟子に近づき、イエスであることに気付く前から2人に目を留めておられたのです。壊れた世界、傷ついた人間性、飢えと渇きのあるところにイエスはご自身から近づいていくのです。〈失われた〉者、〈迷い出た〉者、〈飢え渇く〉者はイエスの祝福の御手に触れられるのです。

2つの物語にはもてなしを行うことが中心にあります。2人の弟子はイエスと共に歩き、エマオという村に近づいていきました。ザアカイの物語とは違って、イエスが何かを言う前に、2人の弟子はイエスを引き止めます。「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」とイエスを誘うのです(24:29)。しかし、結果は似ています。2人の弟子も、ザアカイも、イエスをまず喜んで迎えます。そして、ルカによる福音書ならではの巧みな仕掛けが組み込まれています——それは立場と役割の逆転です。招かれたはずのイエスが、もてなす側に回るのです。24章30節と31節をお読みします「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」。

イエスが、パンを裂き、渡すと、2人の弟子の目が開き、一緒に旅をしていた人が実はイエスであることが分かるのです。最高のもてなしですね。見知らぬ人、あかの他人と誤っていた人と食事をしていたら、その人がイエスであったということに気付けるあまりにも大きすぎる恵みと発見です。死んだはずのイエスがずっと二人のそばにおられたのです。こんな素晴らしいニュース（良い知らせ）はありません。初代教会にとって、この気づきは大変重要なものでした。例えば、ヘブライ人への手紙13章2節には次のことが書かれています。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。」。私たちが共に食事を分かち合う時、そこにはイエス、あるいは天使たちがおられるかもしれませぬ。

さらに、このエマオの物語が教会の中で大切にされてきたもう1つの理由があります。教会における「神の見えない恵みのしるし」である聖餐（式）との深い関連性にあります。2人の弟子たちのエマオでの体験はまさに聖餐（式）そのものです。パンを分かち合う時に、イエスの深い恵みを味わったのです。新型コロナウイルスの感染の防止のため、多度津教会では1年以上聖餐式を行っていません。しかし、教会の中で聖餐の儀式は行われていませんが、「キリスト者として生きる」ことは〈聖餐的な生き方〉によって特徴つけられているのだと私は思います。他者との分かち合いの中、交わりの中でイエスが共におられることに気づき、イエスの恵みを心から味わうのです。

冒頭でも話しましたが、私の過去を振り返ると、多くの方々と、いろいろな貴重な経験を共有することが与えられてきました。また、この教会を通して様々な歩みをされてこられた、たくさんの方と出会うことができました。皆さんは、これまでの人生を振り返って、どのような出会いがあったのでしょうか。聖餐式を行うことが難しい中、聖餐が伝えている大事な真理、ルカ

による福音書の2つの物語が伝えている大事な真理を思い起こしていく必要があります。①壊れた世界、傷ついた人間性、飢えと渇きのあるところにイエスはご自身から近づいてくださること、②飢え渇く者はイエスの祝福の御手に必ず触れられること、③他者との分かち合いを生きる時、イエスが共におられることに気づかされること、この3点を心に留めて、神様の恵みを味わい、これからも感謝していきたいと思えます。

イエス様との日々のお会いを通して、私たちは「予期せぬ隣人」、あるいはイエスにもてなしや奉仕を行うようにと後押しされます。なぜなら、イエス様が私たちに最高のもてなしをすでに行ってくださいましたからです。「神様の家族」の一員として、私たちを迎え入れてくださったのです。最後に、次のことを思い起こし、教会の中で、また外で、この世界のために和解ともてなしの働きを進めていきましょう。イエス様は私たち一人ひとりにこれ以上ないもてなしを行うお方であると同時に私たちにとっての大切な客人であります。客人として招待されている私たちは、他の人を客人として招待する自由と責任が与えられています(72頁参照)。お祈りしましょう。